北海道駒ヶ岳の火山活動解説資料（令和８年10月）

札　幌　管　区　気　象　台
地域火山監視・警報センター

９月 23 日以降、山頂火口原浅部を震源とする地震がやや増加し、26 日から山頂火口原浅部の膨張を示すと考えられる火口原方向が上がる傾斜変動が認められました。10 月２日には地震回数が明瞭に増加し、傾斜変動量も増大しました。
このことから、山頂火口原内で小噴火が発生する可能性があると判断し、２日 07 時 30 分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを１（活火山であることに留意）から２（火口周辺規制）に引き上げました。
３日以降、地震回数が減少し、傾斜変動も鈍化しましたが、25 日には継続時間の短い火山性微動が発生し、傾斜変動の一時増大を伴いました。一方、山頂火口原内の各火口における噴気活動は低調に推移しています。
火山活動の高まった状況が継続しており、山頂火口原内で小噴火が発生する可能性があります。
火口から概ね４kmの範囲では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。
風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

○活動概況

・噴気など表面現象の状況（図１、図５～７、図９-①～③）

山頂に設置した監視カメラでは、昭和４年火口でごく弱い噴気を観測しました。山頂火口原の各火口の噴気活動の状況は、９月下旬からの地震増加等以前と特段変わらず、引き続き低調な状態です。

26日に実施した現地調査では、昭和４年火口など山頂火口原内の各火口付近の噴気や地熱域の状況は、これまでの現地調査（前回５月19日実施）及び上空からの観測（前回９月29日実施）と比べて特段の変化は認められませんでした。

・地震及び微動の発生状況（図２-①～⑤、⑦⑧、図３～４、図９-④～⑥）

９月23日から山頂火口原浅部（主に深さ０～１km付近）で地震回数がやや増加し、10月２日にはさらに増加しました。３日以降は減少したものの、17日頃から再び散発的に観測されるようになり、25日には継続時間約２分の火山性微動が発生しました。同微動の発生後、地震の一時的な増加がみられましたが、以降は観測されておらず低調に推移しています。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html
この資料は気象庁のほか、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所及び北海道のデータも利用して作成しています。
資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』、『火山基本図データ』、『数値地図25000（行政界・海岸線）』及び『基盤地図情報』を使用しています。
次回の火山活動解説資料（令和８年11月分）は令和８年12月８日に発表する予定です。

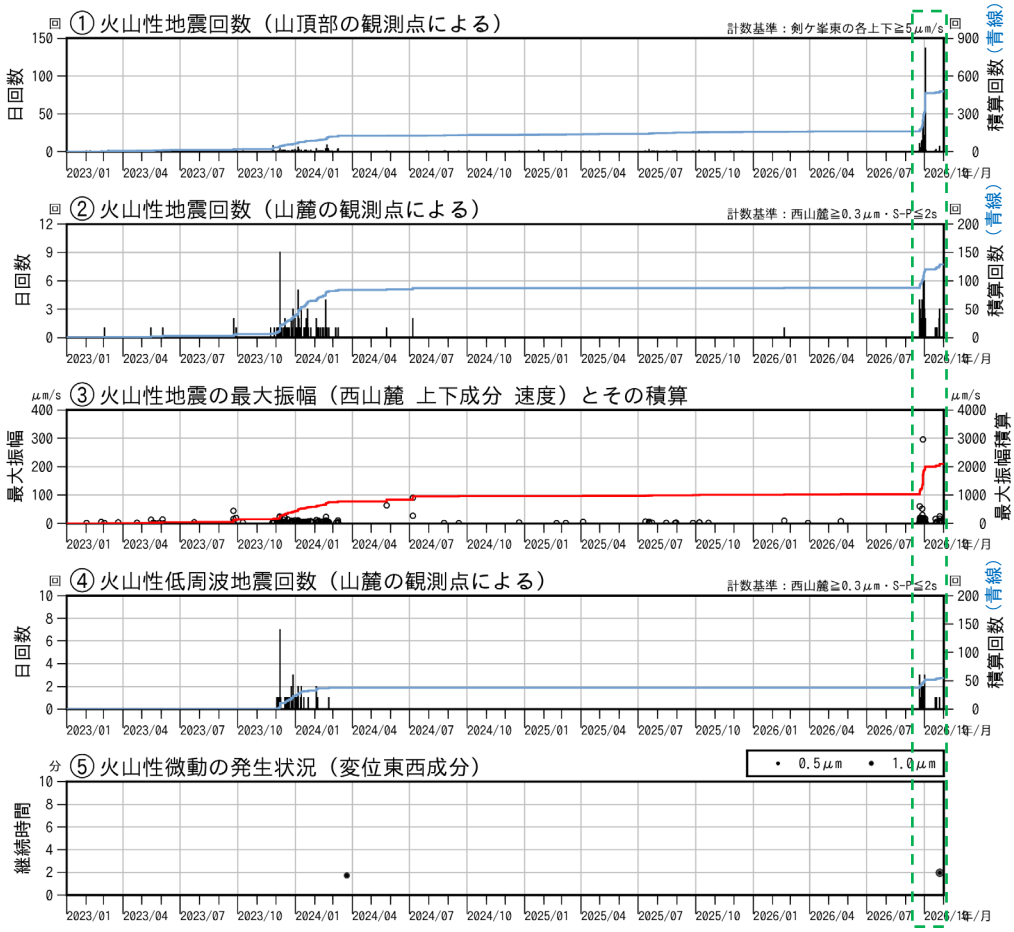
・地殻変動の状況（図２-⑥、図3-2、図８、図10）

９月26日以降、山頂火口原付近に設置した傾斜計で山頂火口原浅部の膨張を示唆する傾斜変動がみられ、10月２日には変動量が増大しました。３日以降は概ね鈍化して推移し、25日に発生した火山性微動に伴い一時的な変動量の増大が認められたものの、その他に特段の変化は認められていません。ただし、山頂火口原浅部は膨張した状態を維持していると考えられます。

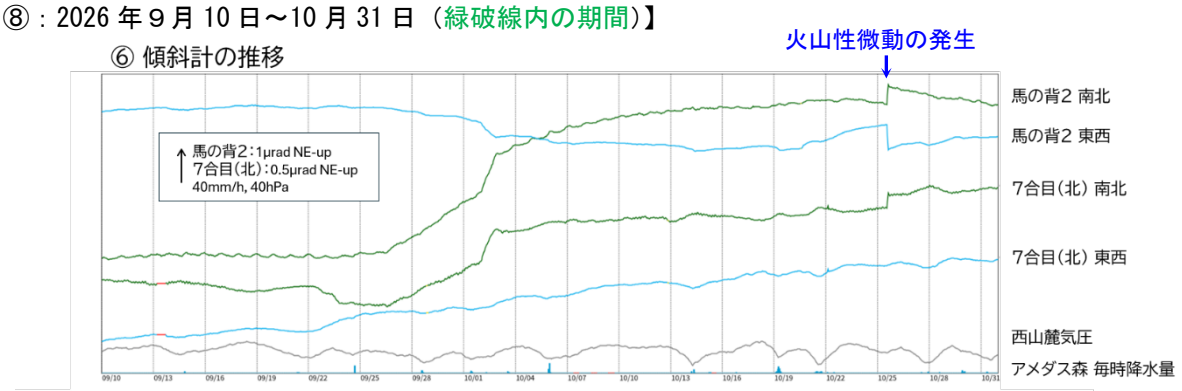
GNSS連続観測でも、９月下旬から10月上旬にかけて山頂火口原を挟む基線で山体浅部の膨張を示すと考えられるわずかな伸長が認められます。



図１　北海道駒ヶ岳　南西側から見た昭和４年火口付近の状況（剣ヶ峯監視カメラによる）



【⑥～⑧：2026 年９月 10 日～10 月 31 日（緑破線内の期間）】



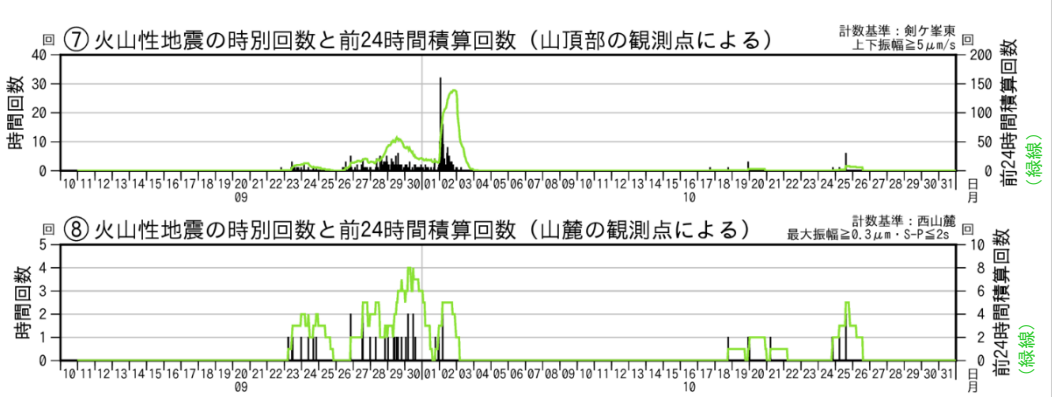


図２　北海道駒ヶ岳　火山活動経過図

（①～⑤：2023年１月～2026年10月、⑥～⑧：2026年９月10日～2026年10月）

各火口の位置は、図12を参照してください。

⑥の傾斜計データには、降水（積雪含む）、気圧変動等の影響と考えられる変動が含まれています。

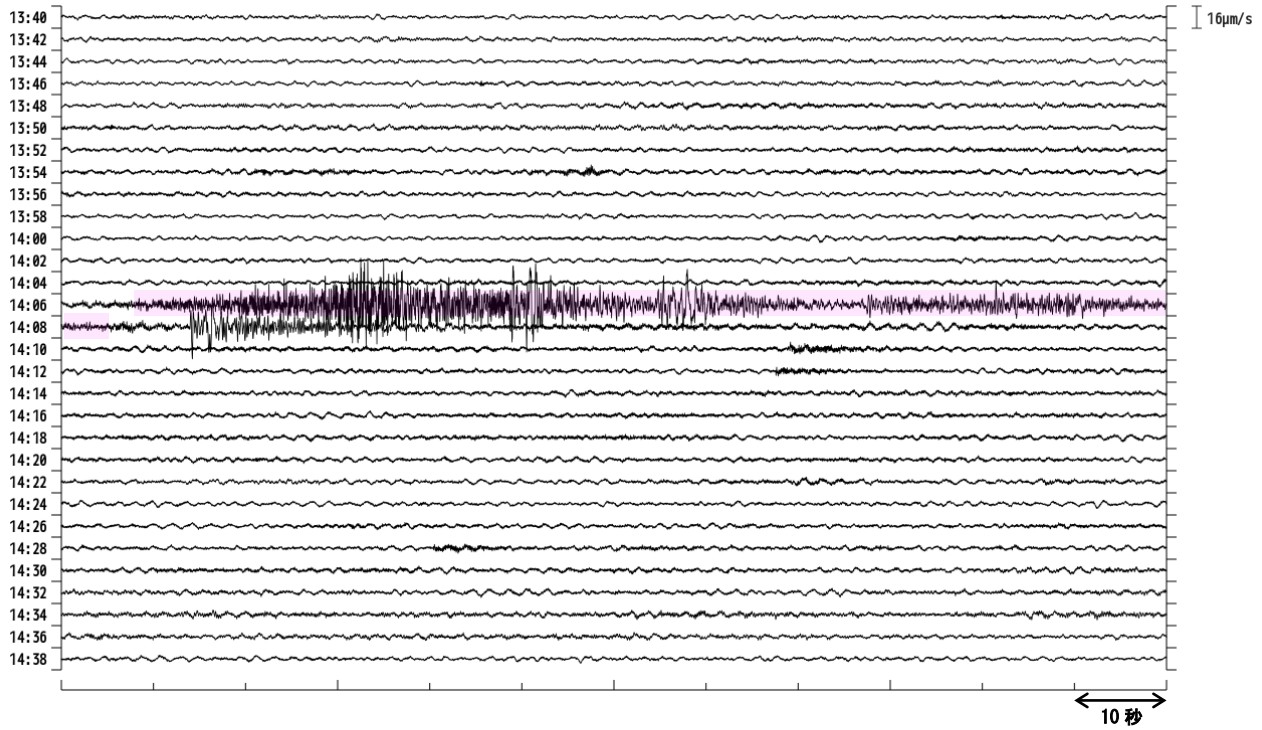


図 3-1　北海道駒ヶ岳　西山麓観測点の速度波形 上下成分（10 月 25 日 13 時 40 分～14 時 40 分）
波形中の桃色のハッチ（■）は火山性微動が継続した時間を示します。

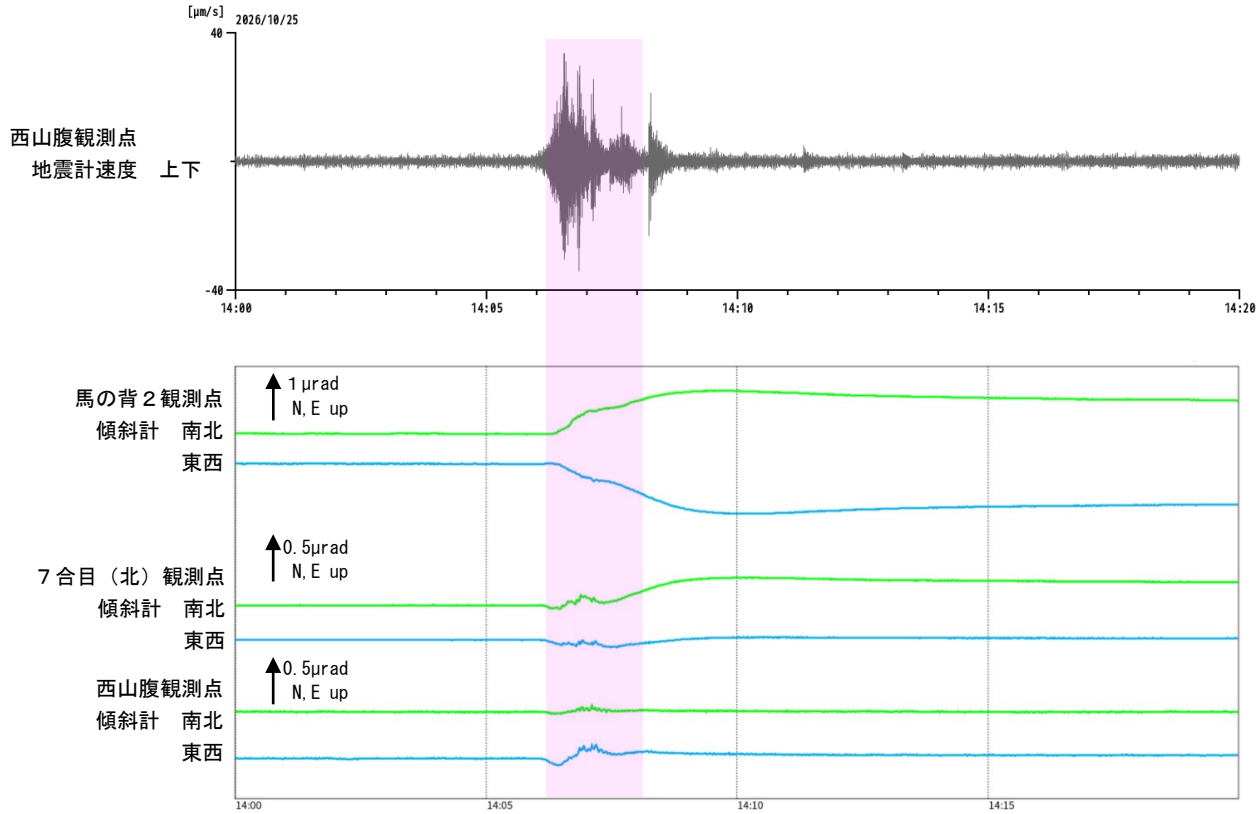


図 3-2　北海道駒ヶ岳　10 月 25 日 14 時 06 分頃に発生した火山性微動と傾斜変動
（10 月 25 日 14 時 00 分～14 時 20 分）
各傾斜データはいずれも毎秒値の推移を示します。
波形中の桃色のハッチ（■）は火山性微動が継続した時間を示します。

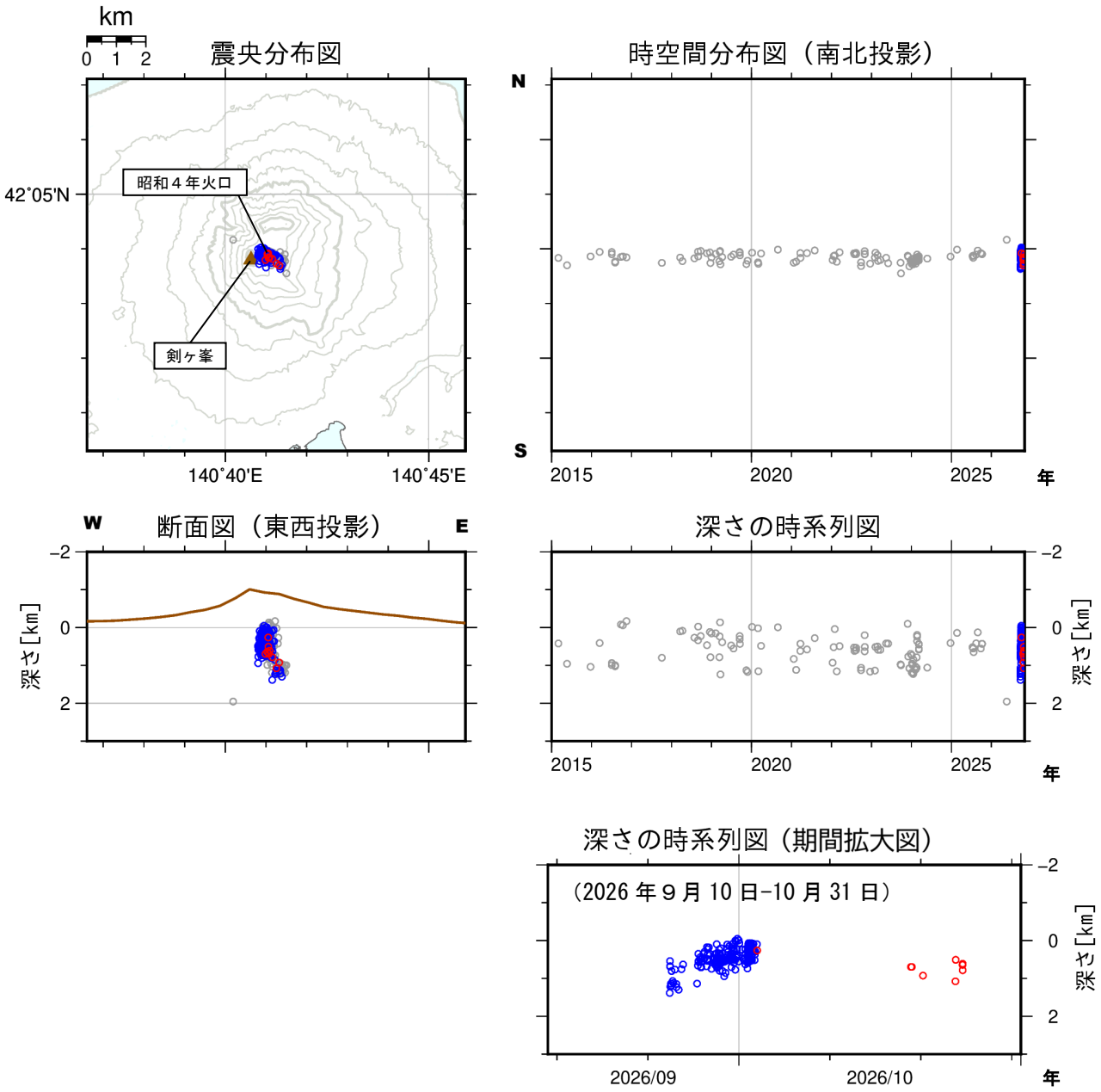


図４　北海道駒ヶ岳　火山性地震の震源分布（2015年１月～2026年10月）

○：2015年１月～2026年９月22日の震源
○：2026年９月23日～10月２日の震源
○：2026年10月３日～10月31日の震源

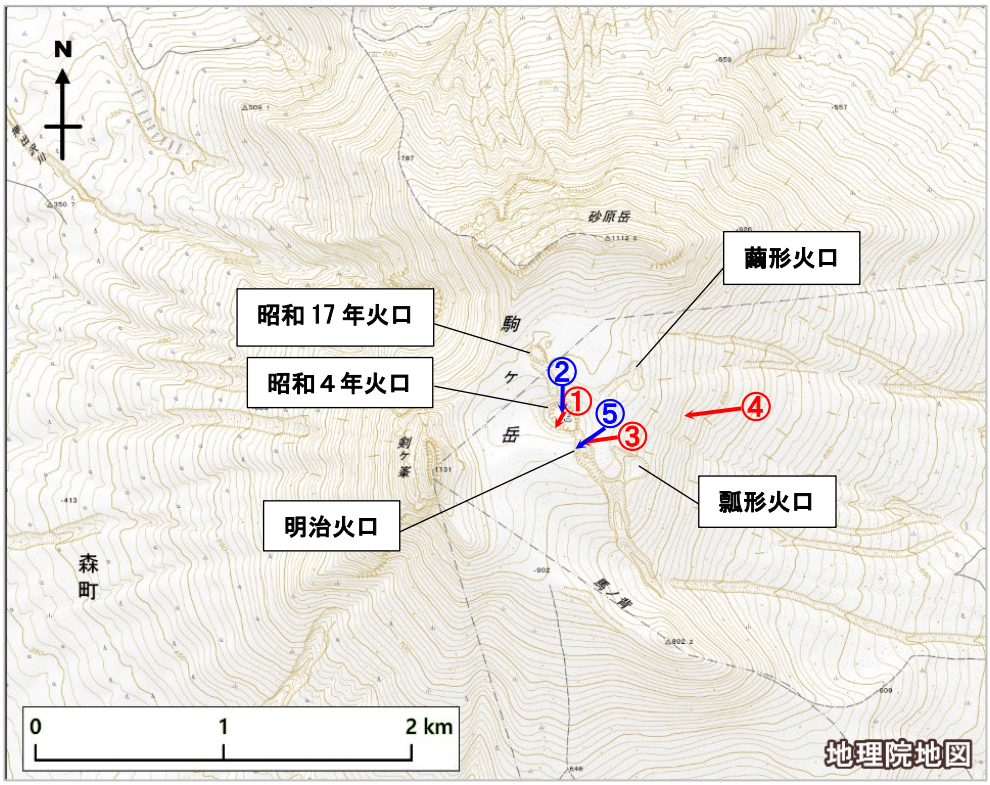
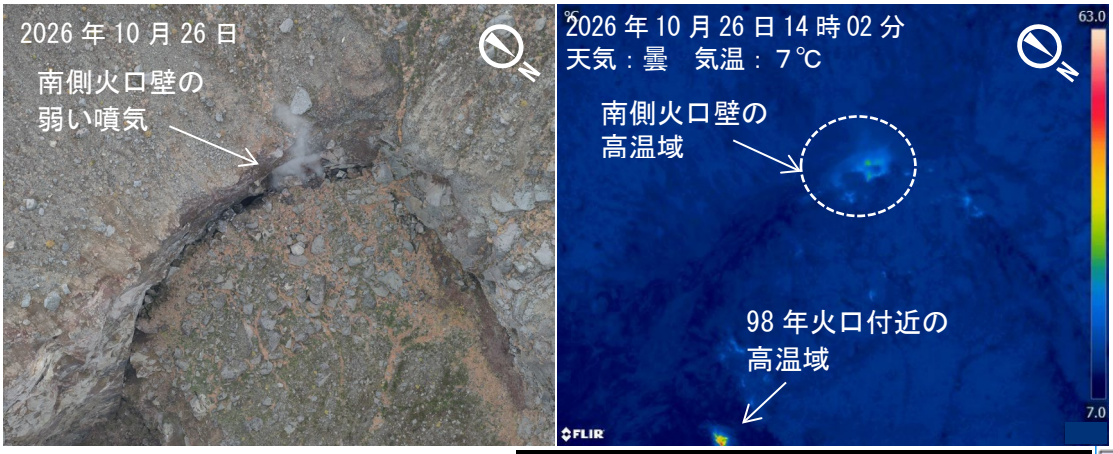


図５　北海道駒ヶ岳　周辺図と写真及び赤外熱映像の撮影方向（矢印）



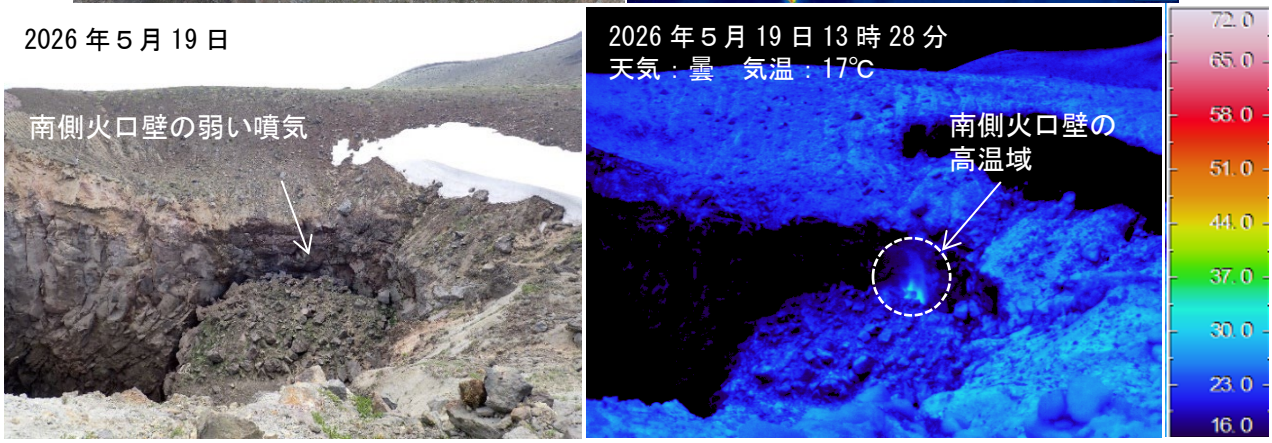


図６　北海道駒ヶ岳　赤外熱映像装置による昭和４年火口の地表面温度分布
上段：北東側上空（図５の①）から撮影　下段：北側（図５の②）から撮影
各火口の位置等は、図12を参照してください。

・前回の現地調査時（2026 年５月）と比べて、火口内の噴気の状況や地熱域の広がりに特段の変化はありませんでした。

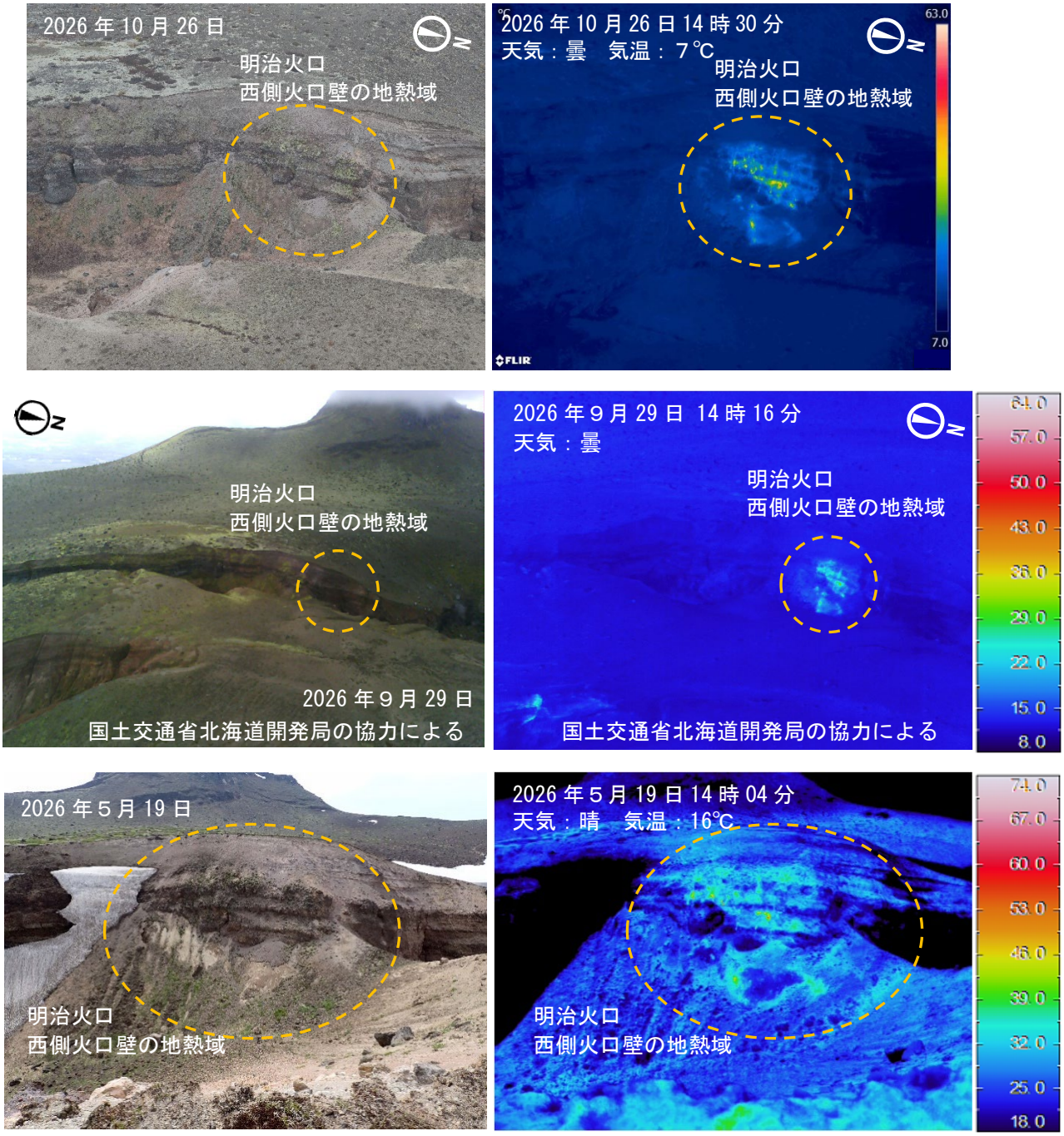


図７　北海道駒ヶ岳　赤外熱映像装置による明治火口の地表面温度分布
上段：東側上空（図５の③）から撮影
中段：東側上空（図５の④）から撮影
下段：北東側（図５の⑤）から撮影
各火口の位置等は、図12を参照してください。

・過去の現地調査（2026 年５月）や上空からの観測（2026 年９月 29 日）と比べて、噴気の状況や地熱域の広がりに特段の変化はありませんでした。

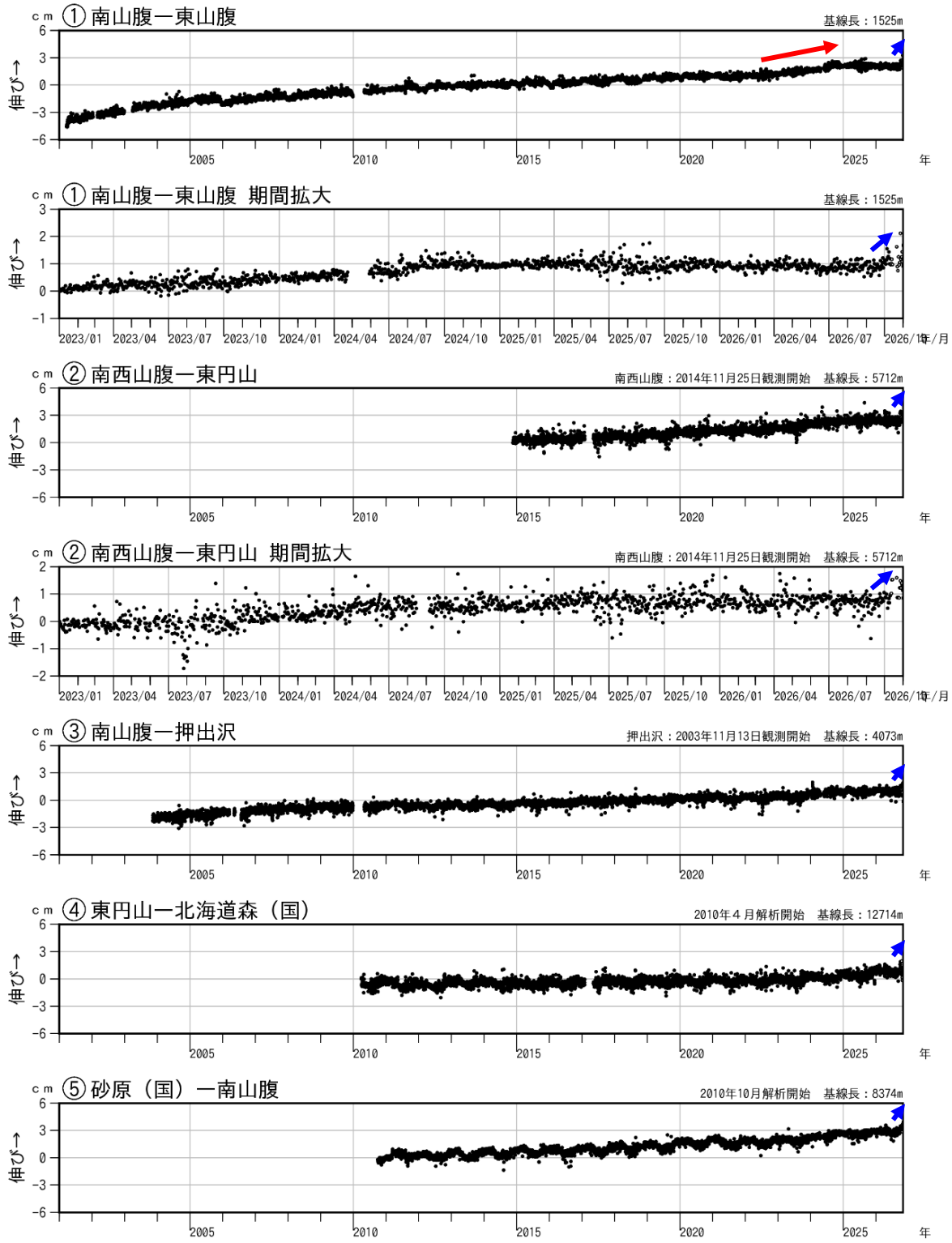


図８　北海道駒ヶ岳　GNSS連続観測による基線長変化（2001年４月～2026年10月）

グラフ①～⑤は図10の観測点配置図の基線①～⑤に対応しています。
グラフの空白部分は欠測を示します。
拡大図中の直近にみられる白抜きのシンボル（○）は速報的な解析結果を示します。

・2022年夏頃から2024年夏頃にかけて山頂部の一部基線でわずかな伸長（赤矢印）が見られたのち、特段の変化なく推移していましたが、９月下旬から10月上旬に山頂火口原付近浅部の膨張を示すと考えられるわずかな伸び（青矢印）が認められます。
・長期的には、山頂火口原付近を挟む基線（基線①、③）で断続的な伸長が続いています。

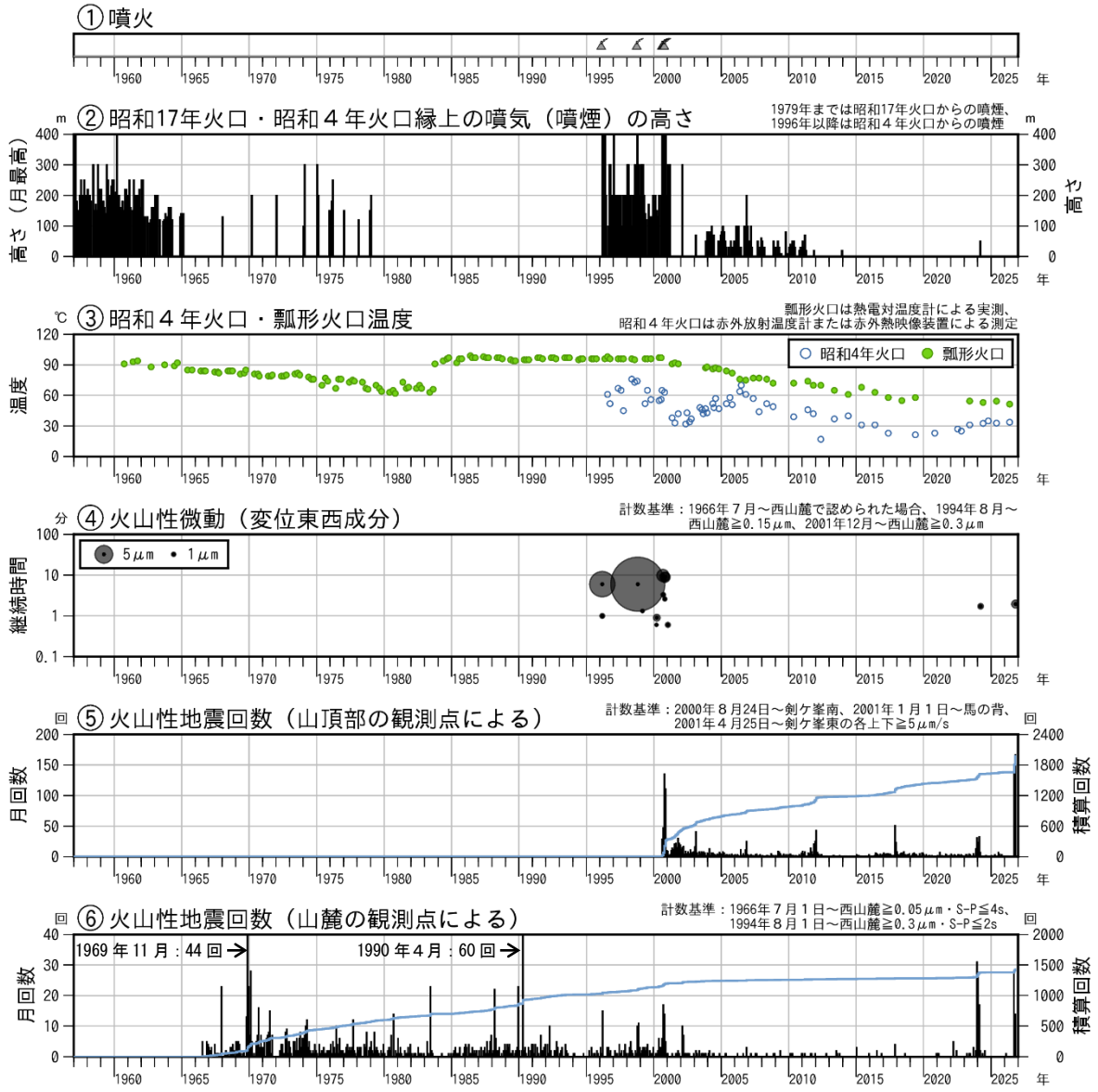


図９　北海道駒ヶ岳　火山活動経過図（1957年１月～2026年10月）

各火口の位置は、図５及び図12を参照してください。
⑤⑥の棒グラフはそれぞれ別の基準で計数した火山性地震の月回数、青色の折れ線は積算回数を示します。

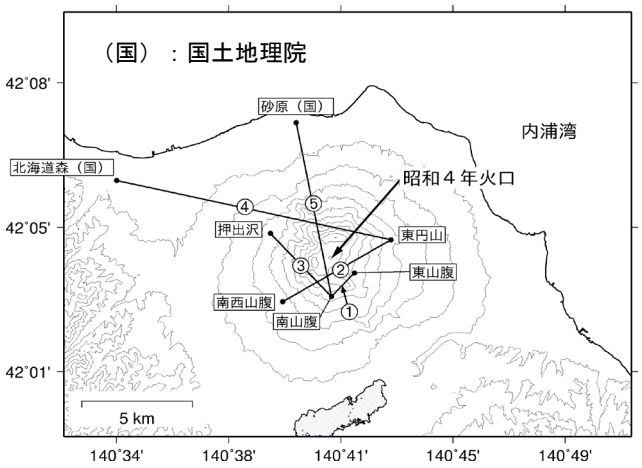
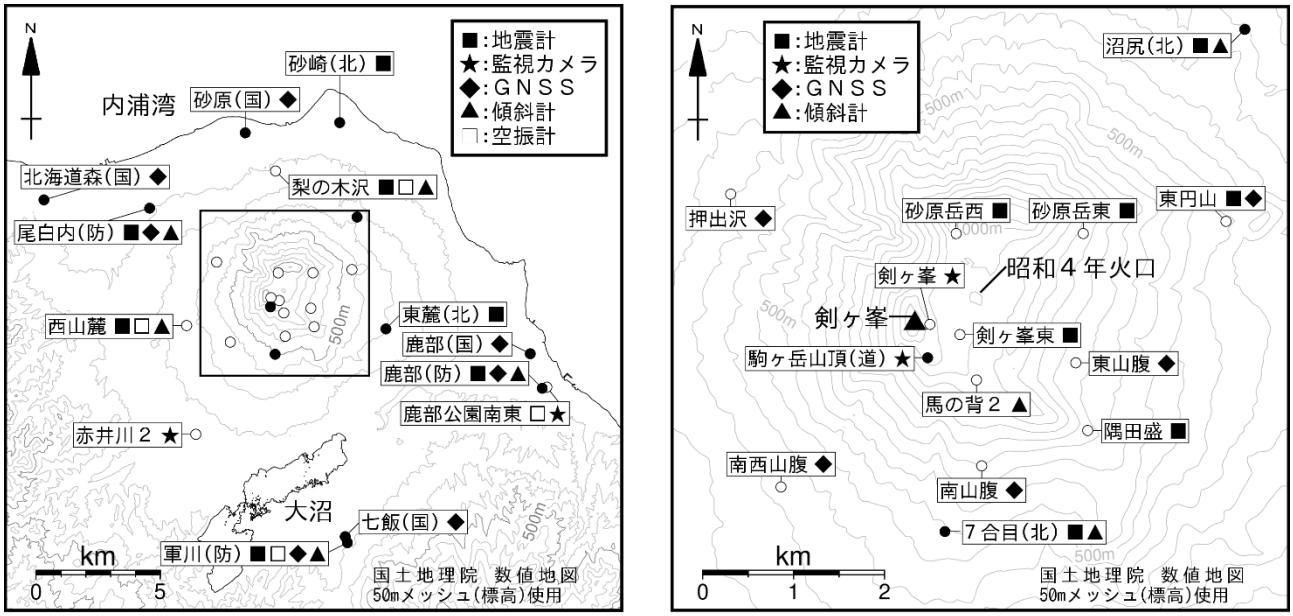


図10　北海道駒ヶ岳　GNSS連続観測の観測点配置図



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は他機関の観測点位置を示しています。左図中の四角囲みは右図の表示範囲を示します。
(国):国土地理院、(北):北海道大学、(防):国立研究開発法人防災科学技術研究所、(道):北海道

図11　北海道駒ヶ岳　観測点配置図

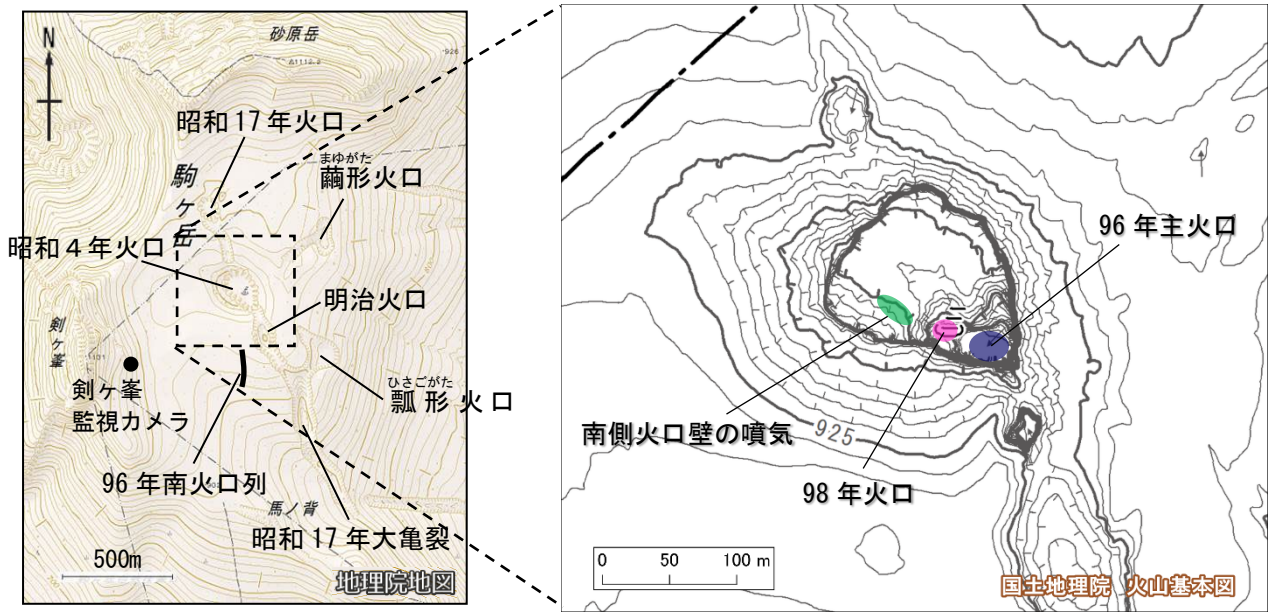


図12　北海道駒ヶ岳　山頂火口原周辺図